

以下は、平成 19 (2007) 年 9 月に、(財) 日本生命財団に提出した、平成 18 年度個別研究「古代ローマ都市、ポンペイ・オスティアにおける水循環システムに関する都市環境史的研究」(研究代表者：堀賀貴・九州大学工学部教授) 報告書、である。

そもそも私が古代ローマ遺跡でのトイレに関心を持つようになり、約 10 年を経て最初にまとめた報告書で、誤りや至らぬ点多々あろうが、ここに掲載することで江湖の批判をいただくことできれば幸いである。

---

## オスティア・アンティカにおける水資源活用：トイレの設置状況から見る

豊田浩志 (上智大学文学部史学科教授)

オスティア・アンティカ Ostia Antica に関する欧米での研究の隆盛ぶりは、末尾の参考文献に列挙した記念碑的叢書・著作、それに Jan Theo Bakker 運営の飛び切り充実したHP (<http://www.ostia-antica.org/>) を挙げるのみで十分だろうが、邦語でそれなりの内容をもつ一般叙述すらほとんどみあたらないのが現状である(むしろ 20~30 年前のほうが丁寧な紹介だった。野上素一「オスティア」野上・金倉英一共著『沈黙の世界史 4 イタリア：エトルリア・ローマ・ポンペイ』新潮社、1970 年、186-200 ページ；浅香正「ローマの外港オスティア」『ローマ文明の跡を訪ねて』吉川弘文館、1975 年、293-309 ページ；後藤久『都市型住宅の文化史：石の文化と木の文化』NHK ブックス 498、1986 年；渡辺道治「オスティアの成り立ち」NHK「文明の道」プロジェクト『文明の道 3 海と陸のシルクロード』NHK 出版、2003 年、34-43 ページ)。したがって、本論に入る前に必要な情報を提供しておこう。

### 序論 オスティア・アンティカ概論

オスティアは、都市の始まりの時からその死を迎えるその日までを追うことのできる、数少ない古代都市のひとつである。その死以後、この廃墟一帯はひっそりと置き去りにされた。なぜならこの地域一帯が居住に適さなくなってしまったからである。

1938 年から 42 年にかけてのその目覚めは、当時の権力者ムッソリーニのご意向によって、いささか乱雑で騒がしかった。電撃的集中攻撃的な発掘が敢行され、その成果は国威発揚に利用された。結果、考古学的知見よりも栄光ある古代ローマの強調が優先され、その観点からの過度の修復も行われたらしい。発掘日誌を含めて記録の保存も不十分で、その一端が Guido e Raissa Calza や Italo Gismondi ら発掘チームのメンバーに伝承保存さ

れるのみだったが、それは彼らの死とともにすでに消滅してしまった。とはいえ、その片鱗は Gismondi 作成の地図や Raissa Calza の案内書での所見に反映している。なかでも Gismondi は、各遺跡の細かい素材について簡明な作図を残してくれたので、貴重である。しかし、そのほとんどがすでにオスティアの浜風と共に消えてしまった：それを Gustav Hermansen, *Ostia: Aspects of Roman City Life*, The University of Alberta Press, 1982, xiii は以下のように表現している。「オスティアにはたくさんの敵がいる。つまりそれは太陽であり、雨であり、雑草であり、伐採であり、破壊者や土産物ハンターたちの奪略である。過去の発掘によって発見された多くの繊細な素材は、これらの敵によって荒らされている。もっと早い時期に注目されるべきであったいくつかの興味深い素材は、現在では完璧に失われてしまった」。その詳細に今は触れないとしても、とまれ、遺跡群として現在我々の目の前に広がる風景は、基本的に都市オスティアの最終段階であることを銘記しておく必要がある。

オスティアの歴史の始まりは、城塞 *Castrum* の建設である。同様に重要な意味をもつのが、城塞の西への市民の入植である。そこは三つの道路が会う場所であり、*macellum* と呼ばれる肉や食料品市場などの都市生活の施設が見られる場所である。この城塞の西の、自発的入植の起源について、きちんと注目されることはなかった。しかし、続く耐久性ある家屋の建築計画は注目に値することが認められている。

オスティアの黄金時代は、オスティアの全域が見事に再建された後二世紀から三世紀の始まりにかけてである。すなわちそれは、クラウディウス帝とトラヤヌス帝の新しい港ポルトゥス *Portus* がその需要の多くをオスティアから奪い取った時代の後にあたる。ポルトゥスがまさしく建設途上にあった時期に、オスティアにおける豪華な建築活動は行われた。この逆説的事実についてこれまで深い議論も説明もされてこなかったし、同様に、オスティアとポルトゥス間の後の取引や政治的問題についても議論がつくされてはいない。

結局、オスティアがその荒廃の中で提供してきた証拠や材料は、これまで正当に扱われてきたとは言いがたい。よってまず、これらの開発とそれらの持ついくつかの可能性についての概要を記しておこう。

### 【城塞 *Castrum* 建設以前】

ローマ建国の祖アエネアスと、オスティア創建者伝承の紀元前7世紀後半の第四代ローマ王 *Ancus Marcius* の記録は、霧と詩的表現以上のものではない。しかしティベリス川河口では活発な活動があったに違いない。川の南（ラウレントゥム *Laurentum*）と河口の東側の人々はそこへ行き着くための道を必要としていた。古代オスティアについての現実的論争は、城塞の正確な位置の選択についての疑問が生まれるまで存在しなかった。論争は *Giovanni Becatti* の解釈と共に始まった。Becatti の解釈とは、そこには二本の道が存在し、それは川の河口まで続いていたというもので、一本はラウレントゥム地方から、もう

一本はローマからのものであるとした。そしてその二本が互いに交差するところこそが城塞の位置として選ばれたとするものである (*ScO*, I, pp.93-95)。しかしながら C.C. van Essen はこの二本の道は共に塩の道であるとし、つまりそれらは互いに交差するのではなく、一箇所へ向かって集中していくものだったとした。それらは河口にある塩田 *salinae* にたどり着く (*Collection Latomus*, 28, 1957, pp.509-513)。van Essen はある現実的指摘をした。それは、教皇ユリウス二世 Julius II の要塞都市の、南ローマから入ってくる古い道は、ローマ門 *Porta Romana* でオスティアに入るが、後に城塞が建設される場所で北に曲がるというものである。この道のラインは Region I. iii. 6; iv.5; xix; xx の中に見られる斜めの線で保存されている。この塩の道は南東からの一本と合流する。

Russel Meiggs は Becatti 解釈に対するこの van Essen の批判を受け入れるが、この道が塩の道であったとする意見には、河口には塩の基礎がなかったとして、これを否定している。「この地方の引き締まった砂は、塩の生産には不向きであった」。van Essen の修正案は妥当だろう。なぜならこの地区の住民は、塩以外の他の理由から河口に行きたかったはずだからである。釣り、貿易、なかでも港にぶつかる商業船の数々によるものと、ローマに向かう交通を含む一般のコミュニケーションなどは、塩に勝る理由になるだろう。オスティアは、市民活動と軍事活動の目的が同じ場所に集まった場所に作られたのである。

【城塞建設とその後】 始めの入植は城塞の西であったとする指摘はたくさんある。実際の公共広場、市場の場所は、始めにここに位置していたに違いない。城塞西門 *Porta Occidentalis* の外にはいまだ四角く開けた広場がある。これは、南側に肉屋 *macellum* と二件の小さな魚屋を含む、小さな市場の跡を推測させる。この四角い広場の大部分を占める泉 (I. xiv. 1) は、後の建築物である。東西大通りを下ると二つの主要な浴場がある。マリーナ門 *Porta Marina* の外は皇帝ハドリアヌスの時代からのポルチコ (列柱廊) の公共広場である。もっと下ると、ポルチコの一帯を前に、見事なバシリカ (*ScO*, VI) へと続き、*Marciana* の浴場へ行き着く。しかしなんととっても人々の目を引くのは、東西大通りの西の、酒場 *taverna*/食堂 *restaurant* の集合帯の存在である。そこには、マリーナ門の外に二つの酒場/食堂があり、マリーナ門の内部には九つ以上ある。こうして、同定されるオスティアのタベルナ *tabernae* のほぼ三分の一がそこに確認できる。オスティアの“下町”が城塞の西だった。

もっと言うと、町の西の端は、東の端もしくは南東の端のずっと前に建設されたことを示す印がある。前一世紀までの入植は基本的に城塞とその西の一帯で行われた。Region II には紀元前一世紀と皇帝アウグストゥスの時まで何もなかった。たとえば Region V には、「泳ぎ手の浴場」*Terme del Nuotatore* (V. x. 3) の下には皇帝ドミティアヌスの時代まで何もなかった。古代オスティアは小さなまとまりだった。

発展についての簡単な調査によると、その日付を紀元前四世紀にまでさかのぼる、より

耐久性に優れた諸建築物の跡がある。

紀元前四世紀。城塞；東西大通りのいくつかの建造物のブロックが 城塞のちょうど東と西に残る。

紀元前三世紀。城塞の北西の角に建造物が残る。これは城塞の外のタベルナの東側の壁である。

紀元前二世紀。城塞の中の三つの家（半世紀続いた）。Regions III と IV に 13 の異なった建築物が残る。東西大通りの東に沿った Region V の中にある三つの建物が残る。

紀元前一世紀。Regions III と IV に 17 の建造物が残る（そのうち七つは前半のもの。二つは前 1 世紀半ばのもの。そして残りの八つは後半のもの）。Region V に 5 つと Region I に 8 つ。Region II に 4 つの建造物。まとめると、Region III と IV の 17 と、他の Region の 17 である。しかし、Region I と V の諸建造物の最後の図面についても記録しておくべきだろう。これらは東西大通りか城塞のそばにあった。Region II の中の諸建造物は、劇場と二つの神殿の類と、倉庫 horrea であった(算定は以下による。ScO, I, p.233f.)。

これらの大まかな統計は、早い時期の建築計画の中心が Region III と IV の中であったことを示す。ちょうどオスティアの、海岸線とラウレントゥムへの道の間の区画である。

オスティアの図面は明らかに、ローマからの道と南からの道が共に城塞に便利のように方向転換をしていることを示している。ローマからのそれはもともと城塞の北の区域へ曲がっており、城塞を完璧にはずしている。この道はまた南へ曲がり東西大通りとなり、そして城塞を通過した後、海岸に向かう南西の進路をとって曲がる。ラウレントゥムからのそれは東へと曲がり南北大通り Cardo Maximus となって、城塞を通過する。城塞西門の外側の古いラウレントゥムの道は、「河口通り」Via della Foce に生きている。

オスティアの古地図を見れば、それが古代の都市計画の影響を受けていないことが明らかである。古代の都市計画とはつまり、ギリシアやイタリアの他のたくさんの都市と、オスティアの創設以前のもっと早い時期の都市が専念していた計画のことである。城塞は四角く広がっている。城塞の東、東西大通りと川の間、ローマ門まで広がる一帯は、公共の資産であり、その境界線も正確に印されている。これは首都法務官であるカニニウス Caninius なる者によって設置された(ScO, I, p.99)。これはオスティアが十分整備された時期に行われた。なぜならオスティアを通るもともとの道がカットされたからである。この道は東西大通りに置き換えられた。家々は、公有地 ager publicus のこの公布が出される前にすでに建てられていた。

城塞と公有地はいくつかの計画が適応された唯一の場所のように見える。言い換えれば、ここには他の植民地に知られるような碁盤目の跡が見られない。特にこの植民地の南東の角は、スラ門から扇形に広がっている。「小ヘルメス通り」Via delle Ermette、「アウグスターレス通り」Via degli Augustali と「サバゼオス通り」Via del Sabazeo は斜めの方角から東西大通りにつながり、この区域では様々な建造物が不規則な形で建てられている。

道の全ては植民地の南西にある農耕地へとつながっている。この場所こそ植民者たちがもともと持っていた土地である。分割地 centuriation はそこでは見つからなかったが、「ラウレントウム通り」Via Laurentina（南北大通りの延長）を含む5つの道路が、航空写真と、Meiggs と John Bradford によって現場で発見されている (Meiggs, p.473f., 580)。この町の一部の図面と、より古い建築物の欠如は、町の南東部の角が長い間開けた土地であったことを示す。

オスティアの季節的特長: Meiggs は特に前スラ時代のオスティアについて多く思い出させてくれる。それは、木や泥でできたレンガなどの腐りやすい素材で建設されていた (p. 127f. 参照せよ、p. 123)。Giuseppe Lugli は、ローマの早い時期の共同住宅 insulae と小住宅 case strette の証拠が消えた場所にも同じ状況を見ることができると指摘している (*Atti della Pontifica academia Romana di archeologia, Rendiconti*, 18, 1942, p.193, n.7)。オスティアのもろい家々はいくつかの優先順位にのっとり、丈夫な作りの家々へと取り替えられた。町の多くのビジネスや活動が集中する地区は閑散とした場所よりも早い時期に建てられた。我々の統計から見て、Region III と IV が南東の Region V よりも早く建てられたことを意味している。なぜなら前者は都市生活の始めの中心地だったからである。Region III と IV はその時期のビジネスの中心地だった。

このことは他の側面からも見ても有効である。季節に左右される職業に多く依存していたオスティアの人口が、流動的であったことは明らかである。オスティアは航海の季節に密接に関連していた。それは夏のみの仕事であり、年間に 240 日だけ行われるというものだった (Vegetius, *De re mil.*, IV.39)。その期間ローマには莫大な物資が持ち込まれた。その航海期の後、船舶数や旅行者数は急激に減少したに違いない。ディオーン・カッシオス Dion Cassios は皇帝クラウディウスの新しい港の建築の理由の一つは、冬の間にもいくらかの穀物の輸入を得ることができるようになるためだったと記している (LX. xi. 2)。ポルトゥスの建築以前、それは危険すぎると考えられていた。しかし後の法律が、冬の航海を受け入れられなかったことを証明している (Emin Tengström, *Bread for the People: Studies of the Corn Supply of Rome during the Late Empire*, Skrifter utr. av Svenska Institutei i Rome, Stockholm, 1974, pp.39-41, 44f.)。施設管理と、仕事量の減った冬の航海のため、少数の乗組員の動員のみが必要とされた。貿易商グループと、サービス業の多くは留まったが、出稼ぎの人々や行商人たち、仕出し屋たちは、自由人であろうが非自由人であろうが、穀物やその他の物資の動向に深く結びついて、旅行者たちへの料理のサービスや、あるいはなんらかの仕事に従事していたに違いないが、その季節が終わった時、彼らは職を失い、どこにでも行くことができた。オスティアは夏の多くの人間の到来に備えてきていたのである。アフリカや西地中海からの旅行者たち、そして商船の乗組員たちは、度々、かなりの時間残留しただろう。特定の場所への通過を待っている旅行者たち、好ましい天気、あるいは官庁からの帰宅許可を待っている船乗り達である (以下参照、A.S.Hunt &

C.C.Edgar, *Select Papyri*, vol.1, *Loeb Classical Library*, London, 1934, no.113 所収の Irenaeus の書簡)。浴場の数と大きさは、その常連の人口に必要とされる収容量を超えていたと思われる。そして夏には人々も浴場 *balneae* の石の柵、ミヌキウス・フェリックス Minucius Felix 言うところの防波堤 *marina lavaera* の背後の海でたびたび泳いだのだろう (*Octavius*, II.3)。レストランとホテル施設については本論で触れる。施設の中には仮の収容施設もたくさんあったに違いない。夏の間、貧しい労働者に立派な収容施設は必要とされなかった。基本的設備を持つバラック街と密集した共同寝室の組み合わせがこれらの人々の必要に合っていたのだろう。

ここで我々の興味を引く時代の間、オスティアの市民達は、ローマの海軍でその空間を埋めなくてもよかった。オスティアではポエニ戦争後、海軍の影響力はあまり感じられなかった。アウグストゥスによる海軍のミセヌム Misenum への移動後は特にそうであった。そしてその時代の前ですら、海辺の海軍施設の全てがカニニウスの公有地に配置された可能性がある (cf.Meiggs, p.580)。

【オスティアの黄金時代】オスティアの急速な発展は皇帝ドミティアヌスと共に始まる。これはローマへの輸入品の拡張に刺激されたもので、紀元前二世紀の間にローマの成長と共に増加した。後一世紀のはじめ、その拡張は存在する全ての施設の中で完璧に成長した。緊急の必要性から皇帝クラウディウスは新しい港を付け加え、一世代後に皇帝トラヤヌスはもう一つの港を付け加えた。これらの港の成長は関係するオスティアの町の成長を必要とした。

クラウディウスの港の建設に続く時代に作られたたくさんの倉庫群 *horrea* は興味深い。クラウディウス時代のもものでは、部分的に発掘されている倉庫として、町の南にある V. i. 2 や、これまで発掘されたうちで最も大きいもので大倉庫群 (II. ix. 3 と 7) がある。皇帝トラヤヌスは *Horrea Mensorum* (I. xix. 4)、小さな倉庫 (III. ii. 6)、*Horrea of Artemis* (V. xi. 8) などを付け加えた。しかしながら倉庫のほとんどはハドリアヌスの時代に作られた。I. vii. 2、I. viii. 1、I. viii. 2、I. xiii. 1、I. xx. 1、III. xvii. 1、IV. viii. 5 である。その後は二つの建物が作られただけである。*Horrea Epagathiana* (I. viii. 3) は 145 年から 150 年の間にアントニヌス・ピウス帝のもとで作られ、大きいが発掘されていない *Horrea Antoniniana* (II. ii. 7) はコンモドゥス帝のもとで作られた。たった二つないし三つの倉庫がクラウディウス以前のものである。V. xii. 2 は紀元前一世紀のもの。IV. v. 12 は後一世紀のはじめの数少ない設備である。そして、東の東西大通りの V. xii. 1 にある印象的な *Horrea Hortensius* は、30 年から 40 年のものである (年代決定は以下による。ScO, I, p.233ff.)。オスティアの貯蔵空間の大切な部分は、新しい港湾施設の直接的影響として、まさしくオスティアの重要性が低下した時に作られたのだった。

コンモドゥス帝の時代後に作られた大きくて重要な倉庫は、すべてポルトゥスに建てら

れた。しかし我々は実際ポルトゥスで何が進行中だったのかについて具体的諸理念を形成する以前に、考古学の調査を必要としている。

前言したように、ドミティアヌス帝はオスティアで建築活動を始めた。より正確に言えば、オスティアの完璧な変換を開始した。町の東の端、ローマ門は大理石で再建され、町の中心に向かって二つの浴場もともなっていた。そして中心にはクリア Curia とバシリカ basilica が主たる新機軸だった。この期間ほとんどのオスティアの高さは5フィート、すなわち1メートル半ほど引き上げられた。これは、この地域と道路と地上階の床をドライに保つため、なぜならこの地域は湿地とよどんだ水に近く、よりよい建物の基礎を築くには向いていなかったからである (F.H.Wilson, in: *PBSR*, 13, 1935, p.53; Meiggs, p.64f.)。オスティアのレベルを上げるためにはかなりの盛り土が必要であった。そして盛り土のある部分は後 64 年の大火災の後にローマから持ち込まれたと推測することはそう間違っていないだろう。フラウィウス朝のもとでローマが再建されたとき、瓦礫の多くがローマ式セメントの中に骨材として使用されたと見なされるのであるが。タキトゥス Tacitus の『年代記』 *Ann.*, XV 43 は、ネロ帝がローマへ小麦を運搬してくる穀物船に、帰りの積荷としてオスティアの沼地へ、廢墟から瓦礫を持って行くように命じたと記録している (「オスティアの沼地は瓦礫のゴミ捨て場と指摘される」)。

続いてオスティアの様子を変えたのは、コンモドゥス帝の期間だった。我々は、現代の都市、我らの都市が大地の上に立っているのを見る。新しい建築は、新しい材料、ローマのコンクリートによって作られた。その強さと多様さは、昔よりもより広い地域と、かなりの高さに建設することを可能にした。とてもりっぱな建築物はハドリアヌス帝の時代からである。その頃から我々は高度に都市化された共同住宅を見、広々とした、空気と光をふんだんに取り込んだ建物が、三階、四階、あるいは五階までそびえ建ち、その空間はかしこく利用され、現代のものにぴったりあてはまるものになっているのを見る。今やオスティアは下水道、水、浴場、そしてあらゆる設備を持つようになる。団結した商人たちが、彼らの組合 *collegia* を強化し、それらの組合は皇帝達に優遇されていた。特に、彼らが皇帝の望みにかなうことをしている場合には。

オスティアの発展のこの期間は特に興味深い。何故なら、これは新しいローマの建築と一致し、そのローマは、大火災の灰から再建したところであった。オスティアを調べる際、同じ期間のローマ帝国を調べると、小さな相違がわかる。「首都図版」 *Forma Urbis Romae* (cf., <http://graphics.stanford.edu/projects/forma-urbis/>) とローマ法は、二つの町が共通する全てを持っている一方で、その面積は違っていることを示す。ローマの住宅は平均的に小さく、オスティアよりもきつきつに詰め込まれている。オスティアの 22 の邸宅 *domus* と集合住宅 *insulae* と共同住宅 *caseggiati* は 181,405 平方メートルをカバーしており、平均すると、726 平方メートルの敷地を持っていることになる (Becatti, in: *ScO*, I, p.170f.)。Lugli は「首都図版」のかけらと、ローマのセヴェルス期の大理石の建物を調べ

た (*Rend. Pont.*, 18, 1942, p. 191ff. ). これらの欠片に見えるものは、38 の、もともと住宅用の家々で、その輪郭は完璧に保存されている。平均的なエリアは 249 平方メートルである (G.Hermansen, *The Population of Imperial Rome: The Regionaries*, *Historia*, 27, 1978, p.129ff. ). Lugli は「首都図版」と現代のイタリアの町の古い地域とを比較し、家の平均的なサイズを発見する。ローマ 232 平方メートル。ナポリ 162 平方メートル。トリノ 240 平方メートル。トリエステ 187 平方メートル。ヴェローナ 281 平方メートル。これらの数字は他の場所でも確かめられる。たとえばエルコラーノでは、家屋の三分の一が平均 185 平方メートルであった (A.Maiuri, *Ercolano. I nuovi scavi(1927-58)*, vol.I, Roma, 1958)。

ローマ都市法はオスティアの建物を説明するために使われる。オスティアの建築物はローマの建築の決まりに従っている。ローマの禁制は、壁の共有を禁止していた (Tacitus, *Ann.*, XV.43)。そしてこれはオスティアにも見られる。そこに与えられたルールを除けば、列柱廊 *porticus* はオスティアの自然な建物である。そしてローマ法で表現された種々の地役権がここで観察される。

【ポルトゥスの出現】オスティアの成長の時代は、ローマの建設が最も発展した時期でもあったことを上で説明した。オスティアに関する限り、全ての事柄に対して敵がいた。二世紀のオスティアの行く末はそれが終わる前に運命づけられていた。

二つの港の建設によってクラウディウスとトラヤヌスはオスティアの存在のための基礎を全て奪ってしまった。オスティアはもともと町の河口にある港の施設に支え、岸に錨を下ろす商人や、彼らの船を砂浜にあげる世話をしていた。オスティアから 4 キロメートルの港の巨大な拡張は、オスティアから多くの部分を奪い取った。クラウディウスとトラヤヌスの運河の始まりは、ローマへの荷物をオスティアを通らないように運命づけ、自然な結果として、その運営とサポートサービスはポルトゥスへと移るはずであった。しかしこれは実際は起こらなかった。トラヤヌスとハドリアヌス、そしてアントニヌス朝は、ポルトゥスが造られていないかのようにオスティアで建設を続けた。オスティア全体は、二つの港が建設された後に、盛大に建設されたのである。いくつかのもともとのサービスはポルトゥスに移ったが、しかし三世紀まではポルトゥスはオスティアに勝つことはできなかった。ポルトゥスとローマに川の交通抜きで直接接続する方法はなかった。我々は四世紀まで、ローマへの直接のポルトゥス街道 *Via Portuensis* を聞かないのである (Meiggs, p.62)。その時代までに、いくつかの道があったかもしれない。しかし、オスティアとポルトゥスの密接なつながり、重要な往来の指標は、フラウィウス街道 *Via Flavia* である。それは幅 10.5 メートルで、これは普通のローマ道の二倍の広さである。

皇帝はオスティアに多くの活動的な諸機能を持たせることで、きわめて精励刻苦な官僚制の部分を創造したように思える。ポルトゥスとオスティアの間に、そしてはそこからロ



ーマへと、定期的なコミュニケーションがあったに違いない。ポルトゥスの中のある場所から、トラヤヌスの橋を越えて、フラウィウス街道へ下り、ティヴェル川をフェリーで横切り、そしてオスティアのどこかへ、ローマへの軽装荷馬車 *cisium* の乗り物をつかまえるなら、たぶんローマ門への道中すべての距離で、5 から 6 キロメートルであっただろう。

【衰退期】ローマ人たちはこの不便さに長い間耐えていたのだが、三世紀の半ば前に、自然な修復がゆっくりと始まった。同業組合広場 *Piazzale delle Corporazioni* が滅びていく前に、船舶業者組合 *navicularii* は、ポルトゥスに移ったようである。世紀のはじめの頃には、彼らはすでに同業組合広場にある彫像の建設をやめていた (Meiggs, p.308f.)。三世紀の終わりには、オスティアは衰退し始めていた。大きな製粉施設と製パン所は、その世紀の半ばに焼け崩れ、荒廃の中に残された。同じことが「ミトラスの浴場」にも起きた。公共広場に建てられた後陣の基礎部分の碑文は、それが、崩壊した瓦礫の中からそこへ持ち込まれたことを告げている。16 の碑文が、同業組合広場 から、円形劇場の修復のために奪われている。四世紀のはじめ、公共トイレが公共広場に作られた。その座椅子は、石棺、墓石、そしてあらゆる他の建物からとった大理石の厚板で作られている。火事後、*Via del Sole* に家は建てなおされず、簡単にバリケードで囲まれた。生ごみと瓦礫はいくつかの建物に蓄積した。そして碑文 (大理石の厚板) は、その床または舗装や 水鉢の修復に使われた (*ScO, I, p.159ff.*)。

四世紀のはじめ (正確な時はわかっていない)、皇帝コンスタンティヌスはポルトゥスに独立を与え、オスティアの重要性を徹底的に減少させた。円形劇場での殉教者聖アウレア *St. Aurea*、聖クイリアクス *St. Quiriacus*、そして彼らの仲間たちの死は、296 年 8 月 24 日のことであるが、これは半分死にかけていた町での重大な出来事だったに違いない。オスティアの深い沈黙は、聖アウグスティヌスと彼の母親モニカとの会話の叙述を通して息づいている。雑踏からひっそりと引っ込み、そのひじを窓の敷居に置いたまま、彼らはそのホテルの庭をながめている。これは 387 年のことである (*Confessiones, IX 10,23*)。

さて、このあまりにも有名な下りの場所を同定する誘惑には、誰しも逆らいがたいものがある。*Hermansen, p.15, n.26* は、以下のように論じ想定している。このホテルの位置はテキスト的には不明であるが、モニカがオスティアで死亡したことは、彼女の石棺がオスティアで発見されたことで立証されている。この聖人の遺物は 1430 年にローマのサン・アゴスティーノ教会に運び込まれた。そして、1945 年に石棺の蓋の諸断片がオスティアのサン・アウレア教会で発見された (*Rend. Pont., 21, 1945-46, p.15f.; 27, 1952-54, pp.271-73*)。オスティアで発掘された場所のうち、アウグスティヌスの叙述にぴったりの場所はたった一つしかない。それは、*Insula di Bacco Fanciullo (I. iv. 3)* ないしその隣の *Insula dei Dipinti (I. iv. 4)* の庭に面した窓の敷居である。これは推測にすぎないが、この区画に注目するのはそう的是はずれでないはずだ。なぜなら隣の「ユピテルとガニュメデスの共同住

宅」*Insula di Giove e Ganimede* (I. iv. 2) は、「少年バッカス共同住宅」*Insula di Baccho Faniciullo* と庭を共有しているし、*Galza* によればその耐用期間の後半にそこはホテルであったとされているからである (*Monumenti Antichi*, 26, 1920, p.374)。古代において、同じ職業の従事者は群れる傾向があった。この大胆な想定は、A. C. Deliperi の主張「アウグスティヌスとモニカはオスティアのキリスト教会の一室に収容されていた」(*Pantheon*, 5, 1951, p.271f.) によって刺激されてきた。Deliperi が彼らがそこから眺めていたと信じている庭は、実際には教会に先行している浴場の中の一室である。他方、ポルトゥスのほうがアウグスティヌスのホテルとみなすのにより相応しい場所かもしれない。四世紀の後半であれば、海上貿易はポルトゥスに集中していた。そしてヒエロニムス Hieronymus は、そこのホテルのことを記録している (*Ep.*, 66, 11; *Ep.*, 77, 10)。しかし、彼女の石棺の蓋、それから石棺自体がオスティア・アンティカで発見されたという事実が、旧オスティアのほうが有利と述べている。さらに、アウグスティヌス自身がポルトゥスではなく「*Ostia Tiberina*」と述べている。

## 本論 オスティアにおけるトイレ問題

水循環の問題は大きく上水と下水に関わるが、本報告ではもっぱら下水関係に論点を集中する (オスティア上水の水源は、ローマへとティベリス川を遡ること直線で 10Km の現 *Acilia* 附近の高地に同定され、オスティア内での配水システムについての研究もある。cf., *Meiggs*, p.112f.; *Ricciardi e Scrinari*, vol.2, p.67f.)。とはいえ、我が国における標記研究は、皆無といってよい。管見の限りで、かろうじて以下を瞥見しえるのみ。松井三郎「古代ローマの水道と下水道」『日伊文化研究』第 22 号、1983 年、3-17 ページ。また文献豊富な欧文においても (Ed. by Örjan Wikander, *Handbook of Ancient Water Technology*, Brill, Leiden/Boston/Köln, 2000, pp.103ff.)、実地検証した上での論述かどうか疑問を感じざるを得ない記述が目につく。豊田はこれまで約 20 回以上オスティア遺跡を訪問し、とにかく遺跡中を歩き回ってきた体験を持つ。同様にポンペイとエルコラーノ遺跡でも彷徨を繰り返してきたが、非公開の制限が多い後者に比べ、オスティアにはそれがほとんどないのが幸運といえる。その見聞にもとづく限り、未解決の謎が山積といってよい。

たとえば、James E. Packer は、オスティアの集合住宅を実地調査し、ポンペイ、エルコラーノ、ローマのそれらと比較検討した結果、オスティアの特徴のひとつに「便所を持つものはごく少数で、台所はもっと少なかった」ことを挙げている。そして「建物の中で最善の一階にトイレや台所がないということは、上階にも存在しなかったと推定できる」と断定しているが (p. 72f.)、これははたして事実なのであろうか。また、日常生活にかかわる「実際の生活ユニットの大部分が、小さく、狭く、また採光すら不十分だった」一方で、

オスティアには 14 の公共浴場があって、住民はどこからでも 5 分以上歩かないでいけたこと、街の中心と、そこから 10 分とかからず街の東と西の端にも公共のスペースがある等々と列挙した上で、オスティアでは、市民の「要求のほぼすべてが家の外で満たされ」るよう、「都市全体がひとつのユニットとして機能することを意図されていた」、「したがってある意味で、都市全体がひとつの複合的な住まいを構成し、個々の住居はおそらく重要さにおいて最小要素だった」とまとめている (p. 73f.)。たしかに、ポンペイ・エルコラーノに比べて、オスティアには大小さまざまな浴場をみることができる。トイレにしてもポンペイよりも明らかに多く目撃されるが、だからといって、市民生活において屋外の公共トイレ使用が一般的だったといえるのだろうか。

謎といえば、男性が小用をなす場合、現在でも洋の東西を問わず、多くが壁に向かっての立ち姿が一般的であるが、古代ローマ時代はいつも便器に座っての営みだったのだろうか (そのように表現されるのが常であるが)。よく見られる復元便器の形態は男性が小用するのに適合しているようには思えない。大便の後始末についても、一般にもっともらしくいわれている棒の先に装着した海綿の使用や、便座の足元に切られた溝の流水利用についても、実際に座って実演してみると、けっしてスムーズな動きになりはしない。身体構造上不自然で、思いのほか無理な動きを求められる。それに大群衆が蝟集するはずの円形闘技場や円形劇場、競技場に明確な公共トイレが目撃されないのは、なぜか。飲食に放尿・排便はつきもののはずだが、ほとんどのタベルナにトイレが常設されているように見えないのは、なぜか。日常体験を投入すれば自明の発問にすぎないが、並みいる諸先学は誰もこのような素人の疑問に答えてくれない。諸疑問の解決には、地上部分の残存遺跡のみならず、排水構造等の地下埋蔵遺物の網羅的調査が必須であるが、地上部分の奇跡的残存が、当事者にその保存に全力を傾けさせ、ポンペイにしろオスティアにしろ、地下構造の究明は思いのほか進んでいないという事情があるようだ。本報告ではその予備的表面調査という位置づけで、得られた諸知見に基づき以下の論点に限り私見を述べたい。

(1) ほとんどの場合、遺跡に残存しているのは建物の地階 *pianoterra* (わが国でいう一階) 部分、および基礎 *fondamento* であるが、そこから得られた知見で往事を再現することには、事実誤認の誘導素因がある。すなわち、かの地の建物にほとんど常に付帯している地下 *sottoterra* 構造、それに地階に付属した中二階 *mezzanino* や、一階 *primo piano*、二階 *secondo piano*、三階 *terzo piano* (わが国でいう二階、三階、四階) の状況が視野から欠落しがちである、という基本的問題である (なお、以下において階表示についてはわが国の慣例に従うことにする)。これは二階を「貴族の階」 *piano nobile* と称して住居の主階とみなす伝統が古くからイタリアにあった、という事実を照らせば自明であろう。それを S・ギーディオンは以下のように述べている。「オスティアの共同住宅は、高さにおいても構成においても、パリのリヴォリ街の共同住宅 (一八二五年頃) とそっくりである。オスティアにおける主たる特徴は、一階にさまざまな店舗、その上に中二階、さらにその

上、二階には、富裕階級のピアノ・ノビーレがあり、バルコニーが前面を走っている。三階と四階には貧しい人々の粗末な部屋がある。それらは、十九世紀の大都市における居住形式として、ナポレオン以降の時代のパリにおいて、ほとんど同一の構成をとって再び現れる」(前川道郎・玉腰芳夫訳『建築、その変遷：古代ローマの建築空間をめぐって』みすず書房、1978年、313-4ページ)。

驚くべきことに、現在のイタリアの集合住宅においてすら一階は店舗・作業場が普通で、住民の日常生活の場、とりわけ寝室や居間といった機能はそこにはない。往事において、二階こそが最も快適な生活を営むことができる「貴族の階」であった。彼の地では自明のこの常識がなぜか先行研究において消え失せていることを、筆者は訝らざるをえない。とにかく、遺跡にかろうじて残存している地階部分のみの知見で古代ローマ人の日常生活を再現しようとするのは、無謀な営みといってよいであろう。

余談になるが、イタリアの集合住宅において長らく首座を占めてきた二階が、その座を、広々としたベランダを有し巷の騒音を遮断できる屋上階に譲るのは、エレベーターが設置されて上階での生活の不便さが解消されて以降（ということはごく最近のこと）と聞いたことがある。

(2) オスティアにおいて顕著な傾向として、公共浴場・公共泉水付近に常設の固定便座・常時流水型トイレが多く見受けられる。以上に注目して、以下(ア)～(ウ)のような暫定的見解を提示する。なお、使用述語について付言しておく。筆者は、当該時代のトイレをとりあえず形態を重視して便宜的に以下のように区分したい。

種類	形態	洗浄方法	設置場所
(a) 公共トイレ	便座/直下型下水構造	常時流水	浴場・ニンフェウム・泉水周辺
(b) 邸宅トイレ	便座/直下型下水構造	常時流水	同上(部屋として独立)
(c) 台所トイレ	便座/導管型下水構造	汚水利用	台所の横・階段下空間
(d) 店舗ないし庶民トイレ	便座/便壺・木桶	再利用?	階段下空間
(e) 可動トイレ	溲瓶・オマル?	再利用?	ベッド下など [図版 01]

先行研究者の言によると、本格的な下水道は、目抜き通り地下のみに敷設されていたので、裏通りの家屋はその恩恵にあずかれなかったし、大通りでも下水排出の仕組みを持たない家屋も多かった。ポンペイの場合、ほとんどの家屋のトイレが台所内部、あるいは台所付近にあり(よって「台所トイレ」「主婦用トイレ」と称される)、多孔性の溶岩をくりぬいた便壺に尿尿を溜める方式=汲み取り便所(人糞の肥料活用?)であった。人糞は汲

み取り業者 *stercorarius* により汲み取られ、シルペア *sirpea* なる柳かごに入れられて、プロストルム *prostrum* なる簡素な荷車に積載（ないし、舁で運送）され、近郊の農地へ搬出・販売された（池口守「古代地中海世界の都市近郊農業：ローマ人は人糞肥料を用いたか？」徳橋曜編著『環境と景観の社会史』文化書房博文社、2004年、13-47ページ）。このように、食物連鎖のリサイクルが強調されている。また、小尿中のアンモニアを縮絨工程に利用すべく回収していたという話もある。これなど、大量の水で洗い流す (a) ~ (c) ではなく、(d) や (e) の場合可能となるはずのものである。

また、共同研究者の堀教授によると、たとえばポンペイのホテルと目されている VII. xii. 35 では、奥右手の間口が狭くて奥行きのある部屋がトイレで、床は平煉瓦が奥に向かって少し下がりながら敷き詰められ、最奥部は浸透式になっていて、少し掘ると砂が出てくる由（閉鎖中で筆者未見）。要するに、気候的に乾燥し土壌的には火山灰質なので、本格的な下水管構造がなくとも十分対応できるとのこと。筆者はこれを (c) の範疇でとらえたい。また、邸宅内にしても当然 (b) のみならず (c) 以下があったであろうが、触れることができるのは、遺物・構造が確認される場合のみである。

(ア) 本報告にとって決定的な意味をもち示唆的なのは、上階トイレの存在である。ここで対象となるのは形態的に (c) の類型である。ポンペイでのそれについては、以下参照。Gemma Jansen, *Private Toilets at Pompeii: Appearance and Operation*, in: Ed. by Sara E. Bon and Rick Jones, *Sequence and Space in Pompeii, Oxbow Monograph 77*, Oxford, 1997, pp. 121-134. 幾つか存在しているようだが、筆者確認済みは、V. i. 30, 31 のみで、ここではそれぞれニッチェの中に、壁を隔てて 30 側が二階トイレ、31 側に一階トイレが設置されている。二階からテラコッタ製排水用土管が下っているのも見ることができる [02]。いうまでもなく、二階以上のレベルの壁が残存していて初めて確認可能である。

現段階でオスティアに残存する明確な唯一例として、「彩色ヴォールトの家」*Casa delle volte dipinte* (III. v. 1 : 紀元後 120 年頃創建) の、二階から三階への内部階段手前で東壁面に切れ込む形で、一人用の固定便座型トイレが確認できる [03]。この建物は壁画と舗床モザイクで著名で (cf., *Descritte da Bianca Maria Felletti Maj, Ostia Fasc. I-II: Le pitture delle case delle volte dipinte e delle pareti gialle*, in: *Monumenti della pittura antica scoperti in Italia, sezione terza: La pittura ellenistico-romana*, Istituto poligrafico dello stato, Libreria dello stato, Roma, 1961)、そのせいであろうかオスティア遺跡では例外に属するが、一階部分はタベルナを除いて封鎖されていて、残念ながら見学できない。外壁の厚さ 65cm からこの建物は三階建と想定されていて、実際のところ、建設当初から使用目的に変遷があったようで、研究者によって色々の仮説が提示されてきたことも、それを傍証する。一階の北西角には三世末ないし四世紀前半にタベルナに改装されたようだ。

扉の構造から、一階の東側はホテル構造とされている。上階（二・三階）はホテルないし集合住宅であったと考えられている。それは、一階から上に登る幅広い階段と、先述の二階トイレの鼻先をかすめて三階に向かう狭い階段があって、これらがどのように区別されて利用されていたのかの想定による。前者が主として三階の集合住宅の住民用で、後者が上階のホテル宿泊者用だったのかもしれない。あるいは、内部階段は後代の設置かもしれない。

件の二階トイレの両脇には、左側に台所および水槽、そして右側には簡易風呂場が設置されていて、それらで生じた汚水が排水溝を通じてトイレに流れこむ構造となっている。筆者未確認であるが、トイレの真下の二階に台所が設置されていて、だが台所トイレは設置されていない模様なので（但し、Meiggs, p.248, Fig.16 では、トイレ表記あり）、最初は、二階から一階にかけて分厚い壁面構造体中に排水用土管が埋め込まれていて、直接に地下排水溝に導かれているものと想像したのだが（この建物の外部東側には側溝が掘られていて、排水管開口部と思われる付近には石造りの排水マスも目視できた [04]）、HP掲載の写真（[http://www.ostia-antica.org/regio3/5/5-1\\_7.htm](http://www.ostia-antica.org/regio3/5/5-1_7.htm)）、および Packer 掲載の模式図（Fig.143. cf., p.103）によると、排水用土管は一階天井部分を貫いてから壁隅に塗り込められているのが確認される [05]。このような工事例は、現在のイタリアでもよく目撃されるように、二階トイレが後世の付加的設置であった可能性を強く感じさせる。またHP写真では、配水管の一階床面付近の様子が不明であるが、そこに台所トイレがある可能性も残されている。

補足しておく。すぐ北に隣接する「台形の集合住宅」Caseggiato trapezoidale (III. iv. 1 : 紀元後 128-130 年創建) は、現在ではホテルの宿泊客が、荷駄や馬匹、それに奴隷を預ける馬屋（現在風にいうとパーキング・エリア）と考えられている。それを立証するのが、北側に広く開いた入り口の外側西方向に敷設されている大きな溝構造で、これは馬匹の排泄物置き場である。また内部の床は玄武岩で舗装され、中央部は露天、左右はおそらく地階部分が馬屋で、奴隷は二階に上がって寝起きたのだろう。馬屋内部から二階に行く階段がある。南側にも出入り口があったが、後になって西隅に通りから直接上階にいける階段が設置され、塞がれた。なお、建物内に二つの飼糞桶が現存する由。

閑話休題。この痕跡から、当時最適の居住部分とされていた二階に、意外に多くの固定便座型トイレが設置されていた可能性が出てくるのではなかろうか。要するに、現況の一階のみの遺跡残存状況を暗黙の前提にして立論するのは、危うい。同様の排水用土管の事例として、「ユピテルとガニユメデスの共同住宅」Insula di Giove e Ganimede (I. iv. 2) のダイアナ通りに面した階段右のタベルナの右隅が挙げられる。そこでは地下の排水路まで目視することができる [06]。

また、「戦車御者たちの集合住宅」Caseggiato degli Aurighi (III. x. 1 : 140 年代創建) はオスティアでも例外的に三階の床面を保存している場所である。中庭の西側建物の階段

(三階への踊り場で壁の厚さ 95cm) で中庭の周囲をめぐる三階列柱廊通路の床面に立つことができる。そこから西方向を見やると、二階床面に突き出たテラコッタ製円管とおぼしきものを見ることができる [07]。その部屋には、その構造物を囲むように東と南に壁が作られている。使用目的を即断することは慎まなければならないが、我らのテーマにとってとても興味深い。また、中庭区画の東側列柱廊の一番北の柱の裏に一人用トイレもある(壁を隔てて中庭側には貯水槽らしき構造あり) [08]。またおなじ列柱廊を南で区切る通路の交点すぐ南の壁体にテラコッタ製排水管が露呈している。なおその建物区画の北西隅一階には、大型の公共トイレが設置されている。隣接の北区画が「七賢人の浴場」で、そこにも東端に中規模のトイレがある [09]。

(イ) 第二の検討対象は、「**Tipo の小住宅**」Casette Tipo (III. xii. 1-2) である。この種の集合住宅は、大規模な類例として「庭園の家」Case a Giardino (III. ix. 13-20 : cf., Saskia Stevens, *Reconstructing the Garden Houses at Ostia. Exploring Water Supply and Building Height*, *BABesch* 80(2005), pp.113-123 によると、四階建てで、三階に基本的な洗面所設備があつてそこにトイレもあつたと示唆している)、ほぼ同程度としては「七賢人の公共浴場」Terme dei Sette Sapienti の東側の二棟 (III. i. 12-13 : 平屋と想定されている) に類例をみることができる。とはいえ「**Tipo の小住宅**」は独特である。というのは、南北に細長い長屋形式の二棟の単立型住居(壁の厚さから二階建て)であり、一棟が二区画構成(100-110 年頃創建)で、かくして平面図的に四区画を確認でき、区画内の部屋割りもほぼ同一である。すなわち、一家族におのおの三部屋が確保され、別に明確なトイレ部屋(おそらく台所と併設か)が確認できる [10-1]。注目すべきは、これらトイレは、家屋の格としてどうみても立派でないにもかかわらず、単に固定便座のみならず常時流水型である点 [10-2]、および同一棟の隣家のトイレが背中合わせで構築されている点である [10-3]。すなわち、一階レベルで合計四個のトイレはほぼ東西の軸線上に二列で並んでおり (*ScO*, vol.1 所収の Gismondi 作成図に依る。但し現場で確認すると、2 の北側の便座の向きは東壁沿いに南北と、奇妙なことになっている)、このことから、トイレ溝の直下には大規模な下水構造の設置が予想される点である [10-4]。それを強力に傍証するのは、この小住宅群の西に「トリナクリア(=シシリア島)の公共浴場」Terme della Trinacria、東に「七賢人の公共浴場」が隣接していることで、浴場(常識的には、ティベリス川への排水であるので、「七賢人」のほうからの可能性が大か)からの大量の排水を処理する暗渠が本小住宅群の下を貫通し、それがここでのトイレの一階設置の理由であつたはずである。

あらためてチェックしてみると、オスティアにおいて公共浴場に隣接しての固定便座・常時流水型の設置事例は多い。筆者はオスティアで 10 浴場周辺に都合 18 カ所確認できた(「Foro」I. xii. 1, 5, 6, 8 : 四カ所、「ミトラス」xix. 1、「ネプチューン」II. iv. 1, 4 : 二カ所/「消防隊宿舎」v. 2 : 二カ所、「バシリカ」III. i. 9、「海岸」viii. 2、「七賢人」x. 1, 2 :

二カ所、「六柱」IV. v. 10、「哲学者」V. ii. 7、「太陽通り」vi. 1、「泳ぎ手」x. 3：二カ所。ただし、浴場専用の可能性も含む)。その代表例は、「フォロの公共浴場」Terme del Foro の北に道を隔てて隣接する大型トイレ [=01] と、「宴会場の集合住宅」Caseggiato dei triclini (I. xii. 1) 専用の階段下トイレ [11] である。

不特定多数に公開されている公共トイレと集合住宅内の私的トイレが壁を隔てて位置していることも注目されている。同様のトイレ隣接例もオステアで散見される。I. xi. 3 ([01-d] の壁越しにニッチトイレ [12]) と V. iii. 4 [13] である。厳密にはこの範疇ではないが、「哲学者」を挟む二邸宅（「穀物豊穰女神」ii. 8、「プロティルス」5）周辺は実に興味深く、研究対象として豊富な材料が隠されている（cf., Johannes S. Boersma, *Amoenissima Civitas: Block V.ii at Ostia: description and analysis of its visible remains*, Assen, Netherlands, 1985）。すなわち「哲学者」自体一つのトイレを有しているが、北の邸宅「女神」の南壁の階段下にしゃれた個人用トイレがある他、南の邸宅「プロティルス」の場合、邸宅の南北の壁沿いにそれぞれ三人、一人収容のトイレが設置されている。実は他にも謎の存在があるが、それらの検討は後日を期したい。

なお、ニンフェウム・泉水への隣接例はそう多くない。筆者確認は三カ所で、代表例として「雷神ユピテルの邸宅」Domus di Giove Fulminatore (IV. iv. 3) 北の角地のニンフェウム (5) の裏側の公共トイレ (4) を挙げておく [14]。

(ウ) さて最後に触れるのは、建物外壁に設置された排水管による上階トイレの可能性の追求である。具体的には、構造壁が薄い低層集合住宅（多くの場合、せいぜい二階建て）の場合に該当例が多いと想定するものであるが、その典型例として、またもや上記の「**Tipoの小住宅**」が契機となる。2006年冬の現地調査で思い立って、二つの公共浴場に挟まれた区域の東西軸線の延長を探ってみたところ、奇妙な構造物に遭遇した。それが1のほうの西外壁下に位置する、排水管の土台とおぼしきトラバーチン製の構造物である [15]。中央の穴は直径それは背中合わせの一階トイレ構造のTの交差点上で、要するに地下構造的に連結していることになる。ちなみに基台の穴の直径は25cm。さらに西の延長線上で、隣接する建造物 (III. xvi. 3) の同じく西外壁下に同様の構造物を見つけることもできた [16]。これらの逆方向の東側軸線上に類似構造物は確認できなかった。

そもそも「**Tipoの小住宅**」の壁の厚さは外壁で46cm、内部構造壁は30cmと薄く、それゆえ二階建てだったと想定されている。要するに壁構造内に上階トイレを可能とする排水管を収納する厚さはないので、外壁に装着する形式が採用されたのではないかと想定したわけである。可能性の問題だが、集合住宅完成後の付加とも考えられよう。

ここでは同様の構造物として筆者が注目しているものを、とりあえず列挙しておこう。

I. ii. 2：東西大通りに面した「無言劇俳優アポラウストスの集合住宅」Caseggiato del



Pantomimo Apolausto の北側裏手に位置し、「テルモポリウムの集合住宅」Caseggiato del Thermopolium と「家の守り神広場」Piazza dei Lari に挟まれて展開するこの区画は、なかなか複雑である。元来床は玄武岩で敷き詰められていて、製粉・製パン所を想起させ、事実大型パン焼き釜もある。それはさておき、「広場」に出張った区画の北西の部屋に問題の構造物がある。筆者がこれを「発見」したのは、2004/5年の冬だった。ダイアナ通りから「バルコニーの集合住宅」(後出)の通路を南に通り返けると、中庭風の空間に井戸や内階段の跡、それに東南角に地下構造らしき造作をみつけた。その裏側をチェックしようとちょっと下って部屋に入ると、入り口右手隅の壁の基礎部分に奇妙な穴が開いているのを発見。西側日没直前の薄闇の中で繁茂していた草をむしり、登山靴で周囲の土砂をはねのけて出てきたものが、まさに個人用トイレの座椅子状の形態をしたトラバーチンだった [17]。当初は文字通りトイレを見つけたと思ったのだが、よく見ると前面にあるはずの切れ込みが壁側に穿たれている。これでは使用者は壁に向かって座ることになり、奇妙だなと思ったのが本項目(ウ)の仮説につながる事となった。実は「無言劇俳優」の東側にももともとは北に行くことができたであろう通路状の袋小路があつて、現在行き止まりとなっている壁の下に明確なアーチが認められることから、この付近の地下には排水構造が埋まっていると思われる。

「バルコニーの集合住宅」Caseggiato del Balcone (I. ii. 6) : 「ダイアナ通り」に面し、上述の南に抜ける通路を挟んで、東に一店舗、西に二店舗並んでいるが、西の二店舗の入り口は今は塗り込められている。その西側店舗の北東隅に個人用トイレ、そして壁を隔てて東側店舗の北西隅に穴構造が確認できる。

I. viii. 9-8 : 「共和政時代の小住宅通り」 via delle casette repubblicane が西で南に折れる場所で、「エパガティアナ通り」に西に通り返ける路地の中央真ん中に、トラバーチン製基台らしきものあり。

「クリア背後の集合住宅」Caseggiato dietro la Curia=Casa basilicale (I. ix. 1) : 東の中庭の渡り廊下の北隅にトラバーチン製構造物があつて、ちょっと見で個人用トイレと見紛いそうになるが、おそらく上階からの排水管の基台 [18]。

I. ix. 2 : 中央の東から二番目の柱の南側に上階からの四角のテラコッタ製排水管を内蔵した構造物、基台はトラバーチン製)。

「ミトラの浴場」Terme del Mitra (I. xvii. 2) (二カ所) : 後の教会堂の東側の、北から二つ目の階段下部屋内に、妙な円形の穴構造 [19]。それと貯水槽からの揚水装置に至る路地の東口の北側に、男子小用専門トイレらしきものが [20]。その想定が正しいとするなら、円形闘技場等での男子トイレ問題はほぼ解決されるはずである。

III. i. 12, 13 (計四カ所) : この平屋二棟の集合住宅の中央分離壁の東西端に、奇妙な構造物 [21]。穴が細すぎるのである。なお、広々とした庭の一面に比較的大型の公共トイレも設置されている。

「庭園の家」Case a Giardino (III. ix. 13-20) : これだけの計画的な集合住宅の一階部分に、トイレらしきものが一切確認できなかった。その代わり極めて特徴的だったのは、壁面に上階から一階床下に向けて二種類の矩形のくぼみが数多く目視されたことだった。奥行き 30cm のほうは鉛管が収納され上水が配水され（水漏れによる石灰の付着が見られる）、より小さいくぼみのほうはテラコッタ製の排水管（石灰の付着なし）が収納されていたと想定されていて、二階以上の住民は上階トイレの設備を享受していたと思われる。いわば消極的な意味での証拠といえる。

このような構造はオスティアでは普遍的に見ることができる。そしてこのたぐいが上階トイレと関係しているとするなら、現況では劇場や闘技場でそれらしき設備を確認できないものの、往事においての存在を想定することも可能となるはずである（なお、劇場の一階店舗部分で若干店舗の痕跡をみつけることができたことを付言しておく）。

III. xi. 1 : 西壁の南隅の北の部屋の構造物。

IV. iv. 6 (三カ所) : 一階は「円形神殿通り」に面した商店で、上階はアパートで、建設は三世紀初頭のアレクサンデル・セヴェルス時代。階段の東側店舗の南側両隅に上階からの排水管、階段の西側店舗の内階段裏に排水管。

「テミストクレスの集合住宅」Caseggiato del Temistocle (V. xi. 2) : この台形状の変形区画は、三つの南北に長細い翼で構成され、いずれも壁面が高く保存されているのが特徴となっている。まず東翼のアパートの壁が高さ 3m を保持して南に延びている。それに面した狭い路地の中翼の塀（高さ 2m）には、入り口がもともと二カ所開いていたが、その南の方は後世閉鎖された。その場所にトラバーチン製基台が確認できる [22]。穴の直径は 20cm。同じく上階排水管の基台と思われる。この西翼の西側の構造は、北から五ないし六店舗、そして五部屋を有する集合住宅で、ハドリアヌス時代創建、三階建て（壁の厚さ 60cm）と判明しているが、今問題の中翼と東翼の様子はいまひとつ明確でない。通常は両方とも採光などを考慮して平屋と考えられているようだが、今般の構造物の存在は、中翼が上階ないしはテラスを持っていたことの証拠となるかもしれない。

V. iii. 2 : 「井戸の家の通り」via della Casa del Pozzo と「小ヘルメス通り」via delle Ermette に挟まれた区画の、一番北が「レスラー達の集合住宅」Caseggiato dei Lottatori で、その南隣の、中央通路の南北に二区画づつ方形ブロックがあり、それぞれ店舗と想定されている。問題の構造物は、北の東のブロックの北壁西隅に位置している [23]。一見して個人用トイレと見間違いそうになるが、上階から降りてきていた排水管の基台とすると、その部屋から「小ヘルメス通り」に向けて地下排水溝が伸びているので、たぶんそれに連結していたと思われる。基台の下部構造は東方向へ誘導するように穴が穿たれていて、この想定を根拠づけている。ただ、穴の直径は 15cm とやや小振りなので、単なる排水用であって、上階トイレのそれではないのかもしれない。

### 【暫定的仮説】

本論で述べたことは繰り返さないが、上階での汚水がテラコッタ製排水管によって地下の排水溝に流れ込む構造があったことは立証できたと考える。問題は、その汚水が上階台所や簡易風呂からのもののみならず、上階トイレをも含んでいたのかどうか、であろう。堀教授によれば、上階から壁構造体内部に設置されている導管にはおおむね2種類あって、ひとつは天水収集用で地下貯水槽に雨水を備蓄するためのもの（これは直径が短くオスティアでは10cm程度のものである）[24]。もう一つは通常上階の汚水用と考えられてきた（直径20～25cm）[25]、とのことである。明確なその事例はたしかに諸処に存在している。いずれにせよ、古代ローマ時代の集合住宅の上階にはトイレはなく、住民はオマルや溲瓶を使用してきたとのこれまでの想定は、再検討されるべきであろう。それらの使用はおそらく皆無ではなかったにせよ、そもそも筆者はいまだそういった器具を博物館で確認したことがない。今後、博物館の収集品をそういった観点から見直してみようと思う。

### 【参考文献】

Giovanni Becatti, *Case ostiensi del tardo impero*, Roma, 1949.

G.Galza e G.Becatti et altri, *Scavi di Ostia*, vol.1-14+, Roma, 1953-2004.

James E.Packer, *The Insulae of Imperial Ostia*, in: *Memories of the American Academy in Rome*, vol.31, 1971, pp.1-209.

R.Meiggs, *Roman Ostia*, Oxford, 2nd Edition, 1973.

Theodora L.Heres, *Paries: A Proposal for a Dating System of Late-Antique Masonry Structures in Rome and Ostia AD235-600*, Amsterdam, 1982.

Richard Neudecker, *Die Pracht der Latrine: Zum Wandel öffentlicher Bedürfnisanstalten in der kaiserzeitlichen Stadt*, München, 1994.

Maria Antonietta Ricciardi e Valnea Santa Maria Scrinari, *La civiltà dell'acqva in ostia antica*, 2 vols., Roma, 1996.

Carlo Pavolini, *Ostia, Guide Archeologiche Laterza*, Roma/Bari, 2006.